

吉武輝子

わたくし、八十歳になりました

海竜社



2007年3月

わたくし、
八十歳になりました

目次

序にかえて

母 吉武輝子

宮子あずさ

4

第一章 人間、旬の時代

7

第二章 年齢を口実にしない

15

第三章 補助器具をフル活用へ

25

第四章 老いの落とし穴

35

第五章 お葬式は生きている人のため

43

第六章 駅伝で行こうよ

51

あとがきにかえて

弔辞 吉武輝子さんをお送りする辞

落合恵子

59

序にかえて

母・吉武輝子の気前の良い人生

「わたくし、八十歳になりました」と本のタイトルを書いた時、母はどのような気持ちだったのでしょうか。まさかそれからまもなく、このような日が来るとは思っていないか。でもたぶん、多くの人に支えられてそこまでとり着いたことは、わかっていたと思います。そして、よき友人に恵まれた人生への満足を込めて、このタイトルを綴っていたのではないのでしょうか。

二〇一二年四月十七日十三時十四分、母は長年お世話になった東京厚生年金病院で八十年の生涯を終えました。入院したのは前年の十二月二十一日。その年の後半から再燃していた膠原病こうげんびょうの治療が目的でした。

この治療自体は順調に経過していましたが、一月二十六日に肩関節を脱臼した際、

静脈が傷ついてリットル近い内出血を来してから、衰弱が進みました。予期せぬ事態ではありましたが、こうした現象が起こること自体が、体の限界を遙かに超える闘病の結果でしょう。

膠原病、慢性肺気腫、大腸がん、慢性骨髄性白血病。これらの大病を乗り越えてきた母ですが、肺気腫が進行し在宅酸素になってからの数年は、綱渡りの状況でした。

ラグビーにたとえれば、まさにロスタイム。誰かが球をこぼしたら終わり、という状況で、多くの方に助けられながら、なんとかマイボールを守ってきたのです。

本当に長い長いロスタイムでした。最後は、亡くなる日の朝まで食事をとり、穏やかに苦勞のない国へ参りました。最後の言葉は「もう、いい」でした。

送った身としては、大往生だったと思います。本当に限界まで生ききったと思います。母を見送った今、私の気持ちは、母と大仕事をやり遂げた、不思議な満足感があります。母の人生は、一言で言えば、気前の良い一生でした。常に誰かのために一肌脱ぎ、誰かが一肌脱いでくれる。そんな一生でした。ひどく裏切られたこともあるようですが、基本的に懲りず、また一肌脱いで生きていました。

まあ、娘としちやたまらんこともなかったわけではありません。我が子より人の子が気になっちゃう、みたいな気前よさもありませんでしたから。

でも私も、母のためには一肌脱ぎました。結局のところ、母の作り出す世界は、おもしろかったんですね。あれだけおもしろかったのだから、母はもつともつと生きたかったことでしょう。

それを思うとかわいそうなのですが、たぶん母は百年と言わず、二百年でも三百年でも生きたかったんじゃないかな。だから、多少伸びても仕方がない。輝子さん、そう思つて納得してくださいね！

最後に、常に過剰で楽しい母の人生におつきあいくださいました皆様に、心より御礼申し上げます。また今回、母の長年の友人である海竜社社長・下村のぶ子さまのご厚意で、母が最後に書き残した文章を、このような形でまとめいただきました。厚く御礼申し上げます。

皆様お元気で。

宮子あずさ

第一章 人間、旬の時代

待ちに待った八十歳 いよいよ、人間、旬しゅんの時代じだいに突入

待ちに待った八十歳の誕生日を迎えた。わたくしの最も敬愛する秋山ちえ子さんは、一九一七（大正六）年一月十二日生まれだから今年九十四歳。以前、

「吉武さん八十代は人間の旬しゅんの時代。早く八十代におなりなさいよ。八十になればこっちのものよ」

と言われた時から、わくわくしながら、八十歳の誕生日を待ち望んでいたのである。

実は秋山ちえ子さんには、わたくしが東映の宣伝部に籍を置き、日本で初めての女性宣伝プロデューサーに抜擢された昭和三十六年、三十歳の時にお目にかかっている。宣伝プロデューサーは大作に限って制作宣伝、劇場宣伝を一貫して行うことになっているが、最初に担当した田坂具隆たさかともたか監督の「はだかっ子」の主演有馬稲子さんが、わたくしが婦人雑誌用に企画した対談の相手に、当時新進評論家として脚光を浴びていた秋山ちえ子さんをと切望。婦人雑誌は婦人生活。現在海竜社社長の下村のぶ子さんが編集長だった。二人で秋山さんを迎えに行ったが、玄関の外で待っている秋山さんの人に対する心

遣いに痛く感じ入ったものである。

秋山さんは女子高等師範学校の出だが、かつての師範学校は卒業後二年間は指示された学校で働くことが義務付けられていた。聾啞学校で丸四年間働いた。すでに日本の聾啞学校も、手話法ではなく、アメリカと同じ口話法教育で、相手の唇を見て話の中身を理解し、きちんとした発語で語ることができる教育を一貫して秋山さんは行ってきた。だから秋山さんの語り口はまことに正確である。

秋山ちえ子さんは四年後に結婚、お連れ合いが中華航空に勤務していたので中国にわたり上海に短期間暮らした後、広東で長男を、北京で次男を出産した。お連れ合いは中華航空の副総裁の秘書を務めていてシンガポールに出張している間に二人の子供を夫のご両親とちえ子さんのご両親に見せるために帰国した。戦前だったのでゆったりと乗り物に身をゆだねた帰国だった。

敗戦後、GHQは聾啞学校で教えた口話法のおかげで正確な話し方をする秋山さんに、話し方教室を担当させていたが、「女にも社会性が必要」と「わたしが見たこと聞いたこと」というレポート番組を受け持つようにもなった。

一九五七年から二〇〇二年まで、TBSで月曜日から金曜日まで一時間『秋山ちえ子の談話室』が始まった。近くの商店街の女たちはもっぱらラジオを愛用していたが、秋

山ちえ子の談話室のファンがまことに多かった。

その後二〇〇二年の終わりから二〇〇五年まで続いた『秋山ちえ子の日曜談話室』ではよく新刊書の紹介があり、わたくしの本も娘の宮子あずさの本も本当に何回も紹介してくださった。

ある時秋山ちえ子さんから電話がかかってきて、

「宮子あずささんは吉武さんのお嬢さんだったのね。今あずささんの本読んでいたら、母吉武輝子って書いてあったので本当にびっくりした。だってこれまで読ませていただけの本の中にべたつきが全くなかったのですもの」

と心底驚かれた時は、やったぞという思いでいっぱいだった。

看護師になって別暮らしを始めてからすでに二十五年たつ。あずさが看護師になって家を出て行ったその夜、寂しさに耐えかねて二階にあったあずさの部屋に足を踏み入ると、オートバイ好きでオートバイのグッズで足の踏み場もなかったのに、みんな持ち去られた元あずさの部屋は荒涼たる荒野を思わせた。ビュービューとなる木枯らしの音に窓を開ければ、外は四月の春うらら。わが心になる木枯らしの音を聞いていたのである。

泣きながら階段を下りた時には、心がしゃんとしていた。いろんな運動体に参加して

いたので、娘には必要とされないが、多くの女たちには必要とされていると、人持ちのおかげで心の切り替えができたのである。

毎日携帯のメールに電話と相性は最高いいが、二十五年間の別暮らしの間に他人の間関係に通ずる車間距離と礼節が身についていたのだろう。

ある時ちえ子さんが「吉武さん早く八十になりなさいよ。八十になればこっちのもの歳を理由にいやなことや嫌いな人と付き合わずに済むから本当にすがすがしく生きられる」と言われた。

談話室時代も敗戦記念日の八月十五日には「かわいそうなぞうさん」の絵本を読んでいた。戦時中食糧難時代にぞうは餓死させられた。次の世代に平和な社会を、のそれは祈りであったのだろう。

九十近くで談話室を辞められたが、今年も八月十五日には「かわいそうなぞうさん」を朗読。岩手ラジオから被災地の方々への応援のメッセージを送っている。人の役に立つが「八十になればこっちのもの」の心意気と改めて教えられた。

しかし考えてみたらこれまでは定年は六十歳。最近は六十五歳まで延長する会社もふえてきたが、いずれにしても六十代に入ると企業の縦割り組織から解放され、五郎、秀雄という固有名詞を持った人間として生きることが可能になる。いうなれば六十代は女

も男も役割から解放されて生きる人間の時代である。とすれば、七十、八十、といった高齢期は、まさに人間の旬の時代の真つただ中と言つていいだろう。

わたくしが本当におしゃれを楽しみだしたのは七十代になってから。若い時は中から若さが燃え立っているので派手やかな色とかこつたりとしたデザインの洋服は、若さと競合するのでこてこてとして妙に派手派手しく見えたものである。だから黒とかグレーとか無彩色な色がぐんと若さをひきたててくれた。

でも七十代に入つたら中なる若さが消え果ているからだろう。これまで似合わなかつた赤やオレンジや黄色など派手やかな色がばつちりと似合うようになった。それだけではない。ふりふりいっぱいこつたりとしたデザインのブラウスやワンピースもばつちりと似合うようになった。洋服ダンスを開けるとまさに春らんまん。

わたくしは呼吸器障害があるので、携帯用酸素ポンペをいつもお供に連れている。ポンベそのものが重いのでビニールの紺の布地に黄土色の縁取りをした、まことに機能一辺倒のいささかの美的雰囲気のない外見だった。で考えた。いくらおしゃれを楽しんでも美的雰囲気の全くない機能一辺倒の携帯用酸素ポンペを引っ張つて歩いていたら、何のおしゃれつけもない。いっそのこと携帯用酸素ポンペをアクセサリー化しようと。友

人のデザイナーに相談したら、

「ビニールの袋に着せるお洋服をつくったらどうかしら」って。すぐに携帯用の酸素ボンベの寸法を測り、三度仮縫いかひぬいをしてビニール袋の上からかぶせる美しい袋を洋服に合わせて七枚つくってくれた。

これはおすすすめ。おしゃれの旬の時代を徹底的に楽しむためには壁に姿見用の鏡を取り付けること。わたくし、装って必ず鏡の前に立つの。「アクセサリー化」した携帯用酸素ボンベをもって、鏡に向かって「どう」と聞くと、何枚か着替えたあたりで必ず鏡が言うのである。「よっしゃ」と。その声に背中を押されて、胸張って出かけることにしているのだが、背筋が伸びて我ながらこっさよく見える。

「八十になったらこっちのものよ。歳を理由にいやなことや嫌いな人と付き合わずに済むからすがすがしいわよ」とかつて秋山ちえ子さんが言われたが、何が人間の旬の時代の贅沢かと言ったら、嫌いな人と付き合わないこと。わたくしは食べ物と人の好き嫌いがもともとと激しいが、やっぱりある年齢までは欲気よぎけが強かったのだろう。心底嫌いな人でも、仕事に利益になる人とは表面的には、にこにこ顔で付き合い、にっこり顔で別れた後、気のあった人と散散さんさんになっり顔で別れた人の悪口を言い合ったものである。

八十になっただおかげで、嫌いな人と付き合わない贅沢さを満喫すると、にっこり笑っ

て別れてその後で、散散悪口を言うことによって、人格に生ずる歪みとはみごとにおさ
らばできる。そのおかげなのだろうか。人の役に立つ喜びを満喫すると同時に、なんと
しても次の世代に平和と安全な社会を残したいと、ひたすら願っているわたくしがいる。
「八十代になって倉たてる気は全くないよ」と次世代が生きにくい社会にすることに手
を貸す気はびっくりするほど無くなっている。

今も敗戦記念日に「かわいそうなぞうさん」の絵本を読み続けている秋山ちえ子さん
は、次の世代の生きる社会のありようを願いに願っているからこそ、すがすがしく生き
ておられるのだろう。

それはまさに、人間の旬の時代の主役である証なのではなからうか。これからは人間
の旬の時代の真ただ中を生きられるのだと思うと、まさに待ちに待った八十歳と喜び
が沸き立ってくるのである。

第二章 年齢を口実にしない

筆禅道、俳句、合唱団、ミュージックベル、 いくつになっても未知の世界は花開く

水戸在住の大久保あい子さんは筆禅道の大先輩である。悠遊筆禅道の師稲田盛穂さんせいすいは一九四七（昭和二十二）年生まれ。大久保さんは一九一三（大正二）年生まれ、わたくしは一九三一（昭和六）年生まれ。ともに盛穂さんを師と仰いでいる。

稲田さんは戦中神田でご両親が洋服関係のお店をやっていた。

父親は、戦中は徴用令によって立川の飛行場に通っていた。五たび近く空襲に遭い家を焼かれ、父親の実家のある福島との県境にある茨城県に疎開をした。東京生まれの東京育ちの母親は過疎地にはなじみせず東京に帰りたがったが夫の両親の反対によってやや都会に近い水戸に居を構えた。

水戸にいたころから書道に通っていた高校時代は水戸にある少年鑑別所に花を届けに行っている先輩の後を引き継いで、五年近く通った。結婚して東京に引っ越した後も、書道は続けていた。

子供は三男三女。四人の子供がいた時代から子供たちに安全な食べ物をと地域の女た

ちと地道な運動を続けてきた。労働省に女性労働局ができた記念に作文の募集が行われた。

「国は子供たちに安全な食べ物を与えするために全力をあげるべきだ」という稲田さんの応募作品が入賞した。

わたくしはまるで記憶にないが、その時の審査員の一人だったらしい。そんなことで生活講座の講師をひきうけたりしていた。だから稲田さんのお付き合いは四十年以上に及ぶことになる。

その間も稲田さんは書道が続けていた。ある時夫が「雅子（盛穂さんの本名）にぴつたりの書道があるよ」と教えてくれたのが筆禅道だった。大きい筆で立ったまま腹式法で書く筆禅道は稲田さんにとっては命の根源のように見えた。

筆禅道の師は寺山旦中たんちゅうだった。「書をもって世の中を浄化せん」の高い志に、命の再生を感じさせる師旦中に二十年近くついた。弟子は二十人以上いたが師範の資格を与えられたのは稲田さんと今一人の二人だけだった。

「君には命の根源を表現する能力があるから」というのが師旦中の師範の資格を与えた時の言葉だった。

稲田さんは「悠遊筆禅道」と名付けていいかと尋ねると何の造作ぞうさもなく許可を与えた。

字と同じおらかさに満ち満ちた師であった。

新宿の朝日カルチャーセンターで悠遊筆禪道を教え始めたが、事務員の女性が、「水戸の少年鑑別所で命の根源を見極める悠遊筆禪道を教えてやっていただけないか」と頼まれた。

五年間花をもって元気づけに行つたことのある水戸の少年鑑別所に四十年ぶりに新しい人生を生きるための命の根源を教えに通うことになった。今も月に一回几帳面に少年鑑別所に通つている。

年齢は十四歳から十九歳。彼らの氏名も、どんな罪を犯したかも伏せられたまま、少年たちとは午後二時半から四時半までの真剣勝負である。

我が家で学ぶ時も同じだが、まず第一は養気法。丹田呼吸法の練習をしながら自身の持つ「氣」を確認する。第二は座禪。床に坐して短時間ながら集中力を養う。

第三は、大筆を持つて紙の前に端座して己のすべてを投げ出すように息を吐きながら礼をする。

次に進行方向と逆に穂先を入れ、それを戻して筆力を加え、徐々に息を吐きながら全身心の力を総動員して、洪くじつくりと、あたかも一トンもある石を綱で引き寄せるように、下から斜めに紙の端まで一直線に書き上げる無地棒。

紙いっぱい真ん丸な太陽のように、内から外へエネルギーを発するように、やはり左隅から筆をおこし満身の気合を込めて息を吐きなが円を描く円相。この二つを新聞紙から思いつきりはみ出す勢いで書き、つづいた後、半切の紙に字を書き、名前を書く。その後講評があるが、少年たちは一途に視線を向けている。

我が家の場合はまず、筆禅道の祖と言われる山岡鉄舟などの古の書の名人の書をつつくり鑑賞して、座禅を組み、少年たちと同じように新聞紙からはみ出す勢いで無地棒と真ん丸な円相を書いたあと、白い半紙に文字を書いて名前を入れる。

その後茶筌でお茶をたて、じっくり飲む時の心の安らぎは何ものにも代えがたい。ところで大久保あい子さんは三つ名のあるお姉さま。父足立源一郎と母初の次女として生まれた時の名前はかね。短歌と書道の師としてのペンネームがあい子、師の盛穂さんが贈った名前が蘭風。

十九歳の時に現在の武蔵野音楽学校に進学したが、学業半ばで大久保隆治さんと結婚。技師の夫について満州にわたった。敗戦後苦勞の限りを尽くして無事水戸に戻った。三男一女の子をなしたが、四十九歳で秋津書道会に入会し、その後指導に当たった。

五十八歳でしきなみ短歌会に入会、九十歳の卒寿記念に歌集『しらうめ』を出した。

亡き夫のベッドは未だに整えていかなる時も挨拶忘れず

八十五歳でこの世を去りし亡き母のおなじ齢に我ただ感謝

師の手本布置ふちの厳しさ受け止めて力強さに我が身正す

短歌集『しらうめ』を出した年、秋津書道会では、指導者の講習会を開き寺山旦中と稲田盛穂を講師に招いた。

「書をもって世の中を浄化せん」という高い志のもとに命の迸りほとばしを感じさせる二人の書に参加者はのめり込んだ。まず名古屋のグループが稲田盛穂さんを招いて悠遊筆禅道を始めた。次に九十歳の大久保あい子さんが仲間を二十人集めて水戸で月一回悠遊筆禅道の教室を開いた。

男の子が三人と娘一人がいたが、マンションで一人暮らし。だが一度も稽古を休むことなく、全員にカレーを持ってきてくれたりした。

白寿の祝いに悠遊筆禅道の個展を開いた。NHKの一都六県で「モダンなおばあちゃ

ん」というタイトルで放映されたが、立ったまま気合を込めて書くその姿はとて白寿とは思えない若々しさだった。

実はわたくしは七十七歳で弟子入りをした。お弟子さんたちの展覧会の中でひときわ命の躍動している稲田さんの字に一目ぼれしてしまったからである。

大きな筆にたっぷり墨をしみこませて立ったまま腹式法で書く書道は呼吸器障害を持つわたくしには、ぴったしで二年前から弟子入りをした。

三か月間慢性白血病で入院する前に書いた「無心」の二文字は立派に表装され、弟子たちの展覧会に出品されたが、遺作になってもいいと思うほど迫力のある作品になっていた。



2010年3月作

生きて二年後には師と二人展をと約束しているが、なんと先輩の大久保あい子さんは白寿のお祝いに水戸で個展を開催したのである。

白寿というのは九十九歳。白寿の彼女が個展で三十以上の作品を披露したのである。

NHKだけではなく、水戸のメディアがこぞって白寿の個展を取り上げた。七十代といても通用する若々しい大久保あい子さんが腹式法で立ったまま書く姿が、紙面や画面に登場した。

「わたくしこれまで年齢を口実に腰を引いたことがないのです」

という言葉にわたくしは身を震わせていた。長生きをするとどうしても肉体には引き算の部分ができる。

しかし学習能力は使えば使うほど花開いていくという文章を読んで以来、当時中堅どころの俳人である妹が、六十四歳のわたくしに「句会を開きたい。選評が楽しいのは七人、もう六人は集まったから、輝子さんが入ってくれたら、七人会が成立する。輝子さんは物書きだからいい俳句ができると思うわ」とよいしょしてくれた。

妹が入っていた結社同人は正岡子規の弟子が一九一八（大正七）年に大阪で立ち上げ、句誌『同人』を月一回出していた。

わたくしも結社同人に加入した。句誌『同人』投句五句。同人、黄梅集、紅梅集の三

段階に分かれているが、わたくしは入退院を繰り返してきたが一回も欠句をしたことがなく気が付いたら紅梅作家めざして今年俳句協会に推薦されて会員になった。

俳句協会は俳句のカレンダーを毎年出しているが、初めて十一月に「煎餅と番茶と猫と小春かな」の一句がのることになった。

六十九歳の時料理研究家の小林カツ代さんに「吉武さんは朗々たる声を出すからアルトで門戸が張れるわよ」とののせに乗って合唱団に入り歌手デビュー。その合唱団でピノキオの「星に祈り」をミュージックベルの草分の上野陽子さんが全曲を一人で振り、団員は一本ずつ振った時「吉武さんは手首が柔らかいから音がきれい」との言葉にほいほいとのおつて七十六歳から、ミュージックベルを本格的に習い始めた。

だが七十八歳から始めた筆禅道は、感動に背中を押されての始まりだった。

それなりに未知の才能の開花に長生きをすることの喜ばしさのうち興じたが、しかしちよっぴり苦手なことに対しては「もう七十の半ばを越したから」と年齢を口実に腰を引いてきたところがあっただけに「年齢を口実に未知の世界に足を踏み入れることに躊躇しない」との大久保あい子さんの言葉に心ふるわせたのである。

白寿の個展は、水戸の常陽芸文センターで開かれたが一週間の開催期間になんと九百

人の人たちが訪れた。センターの最高記録だったという。「年齢を口実にしない」というあい子さんの生き方に感銘を受けた人たちがどっと訪れたからだろう。

百二歳でまた個展をと大久保あい子さんは今から着々と準備を始めているとのこと。稲田盛穂さんは、一週間水戸に泊まり込んで大久保あい子さんの個展の手伝いをした。

二年後の八十二歳にわたくしは師の稲田盛穂さんとの二人展を実現しようと固く心に言い聞かせている。

「いくつになっても未知の世界に足を踏み入れ、潜在的能力の花盛りに『うん、わたくしってまんざらじゃないわ』と自画自賛して生きる高齢期は生きて甲斐ある」とはこれも大久保あい子さんの言葉である。

第三章 補助器具をフル活用へ

マイナスをプラスに、 補助器具をおしゃれに楽しんで

一九七七年に「女の選挙」と銘打って、わたくしは革新無所属として参議院の最後の惨酷区ざんこくに立候補した。正しくは日本の女が初めて一票を投じた四月十日を頭に婦人週間とかつては命名されていたが、その四月十日に女たちが、「女の選挙に吉武輝子を出す」と記者会見されてしまったので、立候補させられたといったほうがいいだろう。

なぜ惨酷区と言われたかという、二十三日間で日本列島を端から端まで駆け回らねばならないからである。お金と組織のある候補者は、初日から票固め。でもわたくしのように、「吉武輝子と連動する会」という、ちっぽけな貧しい組織の候補者は、その日から票集めにかからなければならない。効率が悪いと反対の声もあつたが、前泊して沖縄で第一声を上げた。三十代の半ば過ぎに沖縄新報の講座主婦大学に招かれた時、二十代の半ばの真喜屋光子さんが接待役。以来姉妹のごとき付き合ひが続いている。

高校生のあずさが夏休みに光子さんの家に泊めてもらい、ホテルのアルバイトに通わせてもらったこともある。

彼女の夫は穏やかで奥深い心の持ち主だった。化粧会社と提携して、小さい会社を作ろうと着々準備をしている間にがんで急逝した。結構な額の借金が残ったが、光子さんはへこたれなかった。シューズファイターの資格を取りドイツの健康靴の店を出した。わたくしも株主になり、返済無用を宣言した。光子さんのおかげで、沖縄で初の女市長となった東門美津子さんをはじめとして、平和憲法を無傷で次世代にと懸命に生きる質のいい友人が沖縄にいっぱいできた。

質のいい友人が増えるたび、沖縄を踏みつけにして生きている本土の自分が申し訳なく思う思いが年ごとに強まっていたので、お詫びの意味を込めて第一声を沖縄であげたのである。光子さんがまる一日選挙カーに乗ってウグイス嬢を務めてくれた。

当時那覇に広い未亡人市場があった。本土決戦の防波堤になり、地上戦が行われた沖縄は兵隊よりも島民の死亡率が高かった。

沖縄の女性はのんびりとしている男性と違って、もともとはたらきもの。だから未亡人市場の活気は半端ではなかった。真喜屋光子さんの亡くなった夫の母親の店があるので、その店を訪ねたら、周りの人たちが握手、握手。沖縄での得票順位は二位だった。

沖縄で第一声をあげた後は、北海道から九州そして裏日本まで自分でウグイスをやり、あちこちで辻説法をして駆けまわった。松本駅頭で街頭演説をした時は、駅の窓からビ

ルの窓から人々の顔でびっしり。歩道橋の上には人が降ってくるのではないかと思うほどの盛況ぶりだった。

「吉武輝子と連動する会」は名古屋や京都や新潟などに会ができたが、点を線で結んで面として浮かび上がらせるには、やっぱり組織とお金が必要。無所属では一位だったが、当選圏に必要な票はとることができなかった。ともかく文字通り惨酷区だった。四十二キロの体重が終わった時には三十六キロ。

翌年膠原病の類縁シェーグレン症候群を発症した。すでに以前から様々な形で兆候が見られてはいた。

当時NHKではカメラリポートという番組があつて、わたくしはレギュラーリポーターを引き受けていた。ある冬の日の夜に地下鉄工事の取材をしたその翌日から、全身リユーマチで何日も寝たきりになってしまった。

それから一年あまりたつて神奈川県で夜講演を行い、終わった後、礼をして下手しもてに引き下がるうとした時、両足に激痛が走り動けなくなつてしまった。スカートの下の足をみると紫色に腫れ上がっていた。

主催者がすぐに幕を引いて主治医に電話をしてくれたところ「連絡しておくからすぐに警察病院の外科に」との指示。主催者側が車で連れて行ってくれたが、「壊疽えいそになる

恐れがあるから明日両足を切断しましょう」というのが担当医の言葉だった。泣き泣き仲の良かった作家の有吉佐和子さんに電話をした。車で飛んできた有吉佐和子さんは、担当医に会うと、

「検査もしないで切断を決めるなんてあまりにも乱暴じゃありませんか」とまなじりを決して担当医に迫った。その迫力に押されたのだろう。「検査をしても結果は変わらないだろう」と言いながらも、足に血が流れているかどうかを検査することに決まった。翌日、股関節こかんせうの大動脈から造影剤を注入して撮影する検査は大の男が大泣きするといわれている、まさに生体実験だった。ありがたいことにわたくしはやせつぼちなので、痛くて身じろぎしても、ずれずに撮影できるといふ利点があった。かすかだが血が流れていることが確認できた。検査が終わったあとは血が噴き出してこないように、股関節に石を置いて包帯でぐるぐる巻き。仰向けにさせられて寝かせられていた。

午後有吉佐和子さんが来て、

「生体実験のようなすさまじい検査だということは分かっていたけど、検査しないで切断させてはならないと思ったのよ。でもよく我慢したわね。」

と言って何度も何度も頭を撫でてくれた。

わたくしと有吉佐和子さんは同じ昭和六年生まれである。昔直人たち若者に押されて

市川房枝さんが全国区、そして市川房枝さんの秘書紀平悌子きへいこさんが東京地方区と、「理想選挙」のコンビ選挙の有吉さんもわたくしも応援弁士だった。当時農業に科学的な肥料や除草剤などが、じゃんじゃん使われていて、妊婦の流産が新聞に取り上げられたりしていた。

だからわたくしは応援弁士としてひたすら、「子供たちの命を守る安全な食べ物を」と道行く人たちに呼びかけていた。そのわたくしの演説を頭に振った朝日新聞連載の有吉佐和子さんの『複合汚染』が大ベストセラーになった。以来心を分かち合う友人関係が続いた。

わたくしが選挙に出た時は「複合汚染の吉武だと連呼しなさい」と何度も何度も念を押し、毎日宿泊所に電話をしてきては励まし、慰めてくれた。

当時わたくしはヘビースモーカーだったので、あずさが生まれた時から母親代わりを務めてくれた石塚とくさん、通称ばばちゃんと声がよく似ていた。有吉さんは時々間違えてばばちゃんと長話を続けて、途中で間違いに気付くと「ねえ、ねえ。最初からBだつて言つてよ」と言つてはくすくすと笑つていたらしい。なまじベストセラーを出す
と少々の売れ行きでは許されないものがあつて、有吉さんは当時孤独だったのだろう。

わたくしが夜、講演先の福井から帰ってくると、ばばちゃんが「有吉さんがわたくし相手に延々と話されていて、明日朝電話をくれるようにと言われていましたよ」とまぢかねたように言った。

翌朝有吉さんに電話を掛けながら、テレビを見ていたら有吉佐和子急逝というテロップが流れた。一瞬間がくらくらとして、仰向けにひっくり返っていた。今でもわたくしは自殺だったのではないかという思いが消えない。シヨックがあまりにも大きかったのだろう。選挙の疲れがどつと出て、三か月後に膠原病を発症した。膠原病は普通は異物が侵入したときに抵抗体で追い払うのに、正常の細胞を異物と間違えて攻撃を仕掛けてくるといふまことに厄介な病気である。わたくしは膠原病の類縁のシェーグレン症候群。涙や唾液や体液が自分で作れない、いふなれば体が砂漠化していくというこれまたまことに厄介な病気である。

わたくしは肺の粘膜が乾き、自然気胸的な状態になってしまった。途中で空気が抜けたら狭心症で死ぬ可能性がある。左の肺は部屋が三つあるが、上二つと下三分の一を取ってしまった。たぶんその時に右手の神経を傷つけてしまったのだろう。

単行本の締め切りが過ぎているというのに、頭の中で沸き出てくる文章を、右手が文字化してくれない。そんな日々が続く間にうつ状態に陥ってしまった。

そんなある日一人娘のあずさがふらりと姿を現した。「生活者として働かないと職業が身につかない」というわたくしの言葉を真つ正直に受けとめて、看護師になって以来別生活を送ってきた。

「輝子さん、悪いけれど頼まれたエッセイ書きちゃうからね」と言つて、書けずに鬱鬱うつうつとしてゐるわたくしの前に持参のワープロを広げ軽やかにキーを叩き始めたではないか。わたくしには頑かたくなに、古いところがあつて、もの書きは、紙の感触を確かめ、確かめ書くものだと思ひ込んでいた。

横目であずさの手元を見てみると、頭の中に作り上げられた文章が、紙にすみやかに打ち出されていく。ひよつとしたらわたくしも頭の中に作り上げられた文章を文字化できるのではないかと、祈るような思ひで二十分近くあずさに扱い方を教えてもらった。

思つていたよりも機械が体に寄り添ってくる。「あずさ、あずさ。このワープロどこで買ったらしいの」と聞くと、あずさが嬉しそうに「これ輝子さんのプレゼント用に買ったよ。正面攻撃をするとへそを曲げるから一芝居うったの」と言つたではないか。

その日から毎日ワープロのキーを叩きまくつた。半年書けなかつた単行本が二か月で書き上がった。パソコンが出て、ワープロを手に入れることができなくなつたが、ただひたすらワープロ機能だけを使って二十冊近い本を世に送り出すことができた。

初めて単行本がワープロのおかげで出来上がった時、長く生きれば体にはマイナス面がどんどん増えてくる。そのマイナスをプラスに転化する補助器具を楽しんで使わねばとまさに目からうろこの状態だった。

本当にびっくりするくらい補助器具が進歩しているのに、それを使う側の意識の变革と知識が不足のために補助器具の恩恵を受ける機会を逃してしまっている。

わたくしは呼吸器障害があるので酸素ポンベのお世話になっている。現在は家にいる時は部屋の隅にある空気をリサイクルして濃厚な酸素を作り出すポンプから出ている管につながれて仕事をしている。しかし酸素ポンプにつながれて家に閉じこもりっぱなしではなく、携帯酸素ポンベもあるおかげで、ゴロゴロと引きずっておしゃれして出かけることができるようになった。

でも句会の仲間の多くは携帯用酸素ポンベを使うようになると一泊の吟行ぎんこうに参加しなくなる。酸素ポンベの使用時間は九時間ぐらい。だから一泊など死ぬようなものだと考えているのだろう。

ところがわたくしの酸素ポンベは帝人の在宅介護センターが面倒を見てくれている。ホテルに一泊する時は書類を出しておく、ホテルにポンプと酸素ポンベの二本を収め

てくれる。

どこのホテルも「酸素ポンベをお願いした吉武ですが」と言うと「お部屋に入れてあります」と丁寧なこと丁寧なこと。部屋に入ると、スイッチを入れればいいだけになっている。

大分に講演に行った時は、翌日の午前の講演だったので前泊だった。交流の夕食会があった時、「ホテルの部屋に酸素ポンプとポンベがちやんと置かれていた」と言ったら「それは吉武さんがお金持ちだからよ」という言葉が返ってきた。

とんでもない。酸素ポンプもポンベも東京厚生年金病院のレンタルで後期高齢者のわたくしは、何回ホテルに頼んでも自宅に何本ポンベを運んでもらっても月九千円で収まっている。日帰りの講演の場合は帰りのポンベを会場に届けてもらっている。

一泊の吟行をパスしている友人に帝人のサービスの話をしたら、以来いそいそと参加するようになった。本当に様々の補助器具が体のマイナスをプラスに転化してくれている。薄くて淡い色の入っているメガネ。滑り止めの付いた、高さの調節できるしゃれた柄物のステッキ。車が三つついていて階段をすいすいと登れるキャリアカー。意識の変革と知識を増幅させれば補助器具を楽しく使って、マイナスをプラスに転化してくれることを、ワープロと酸素ポンベがしっかりと教えてくれた。

第四章 老いの落とし穴

人様のお世話になること 人のお役に立てること

看護師のあずさが、しみじみと言ったことがある。

「これまで、よりよく生きればよりよく死ぬると、真面目に思い込んできた。だけどね、多くの死に付き合っていると、人につまはじきされている極道者が安楽死を遂げるかと思うと、本当に優しくて人柄のいい人が阿鼻叫喚あびきょうかんの死を遂げる。人間は生まれる時にも何一つ選べないけれど、人生の幕引きの死も、死ぬ時も死に方も選べない。だから選べる時に、選びながら生きていくのが一番なのよね」と。

あずさの言葉にショックを感じながらも、改めて、老いの青写真は綿密に作るものではない。「なるようになれ」と潔く腰を据えてかからねばと心に言い聞かせたものであった。

ここのとこ、二つ三つ先輩の友人が次ぎ次ぎに亡くなっている。

花田生江さんはわたくしよりも二歳年上だから八十二歳で亡くなられたことになる。

若いとき実に経済的な豊かな老いへの青写真が明確で、目標は一億円。もともと資金を

お持ちだったのだと思うが、雑誌社に勤めながら手広くマンションを経営していた。

マンションの掃除を頼むとお金がかかるからと、雑誌社から帰ってくると、それこそ徹夜で掃除に全力を挙げていた。五階建ての駐車場も建てた。

二人が参加している会の全国大会が金沢で開かれた。直江津経由の上越新幹線で帰るために、身体をいたわるといふのは高齢者の最高の贅沢とわたくしはグリーン車に身をゆだねた。しばらくしてはっと花田先輩の姿がないことに気が付いた。

元気な人たちは、もう一泊して能登半島まで足を延ばそうということになっていたが、花田さんはマンションの掃除があるからとわたくしと同じ列車に乗ることになっていたからである。

ひとつひとつ号車を見て回りながら、「ひよつとしたら自由車にいられるのではないか」

という勘が見事に当たり、自由車を開けた途端、一番前の席に先輩がちょこんと座っていた。その隣の席が空いていたので、その席に座り東京まで付き合ってしまったので、結局はグリーン券は無駄になってしまっていた。

話をあれこれしながらしみじみ思ったのはその時わたくしは七十二歳。ということは一先輩の花田さんは七十四歳。

もう貯めたお金を楽しく使う年齢になつてゐるのに、花田さんは、一億円のお金を貯めるといふ綿密な老いの青写真に、がんじがらめになり、使い方がわからぬままに歳だけを重ねている。

着ている洋服は見飽きるほど昔のもの。最高におしゃれの旬に足を踏み入れながら、これまでかつて花田さんが新しい洋服を着ているのを見たことがない。

わずか二つ年上とは見えないふけ方に、改めてしみじみと顔を見やつてしまった。

「吉武さんは華やかな洋服が本当によく似合う」という花田さんに、

「もうわたくしたちには中からの若さがないから、身内の若さと競合することなく華やかな洋服が似合うのよ。花田さんも無彩色の古びた洋服ではなくて、心がうきうきするような華やかな洋服を着たらばっちりよ」と言つても、

「ううん」と首を横に振るばかり。

「実はね。わたくし、体をいたわるのは高齢者の贅沢な特権だと思つてゐるから、グリーン券買ったけど、結局自由車に乗っちゃったからパーになっちゃった」

と笑いながら言つたら、

「なんでもつたないことを。車掌さんに言つてお金返してもらいましょう」

と真剣な面持ちで立ち上がったので、洋服の裾を引っ張つて、

「気にしないで。長年コツコツと働いて生きてきたわたくし自身に対するご褒美のつもりで、買ったグリーン券なんだから」

と言ったら、しみじみとした声音で、

「そうよね。高齢期は自分自身に対して、ご褒美を惜しみなく与える時代なのよね」という返事が戻ってきた。

しかし、その後も古びた洋服を着て、マンションの掃除のために、一切パーティも食事会も欠席。

おまけにマンションが古びたので、かなり丁寧なりフォーム。それだけでもかなりのお金を使ったのだろうが、さらに五階建ての駐車場の二階から自動車が飛び出し、下の家をつぶしてしまった。この事件のために、かなりの金額が使われたことを、愚痴交じりに花田さんから聞かせられたことがあった。

それから半年後に花田さんは心筋梗塞こうそくで亡くなった。

豊かな老後に一億円が必要だったのだろうか。今でも花田さんのことを思い出すたびに、疑問符が湧いてくる。金銭的だけではなく心も貧しげだった花田さんの高齢期は、豊かな老いには一億円をなんとしても貯めるという青写真の犠牲になってしまったので

はないか。

あずさがしみじみと言っていたが、三十代の若い人たちは、年金生活をあきらめているので、老後のための貯金に精出しているけど目標額は三千万円。高齢期に入ったら外国旅行に行くのだといそいそと話していたという。若い人たちの多くは、貯める青写真と使う青写真とをすっかり峻別しゅんべつしているといっている。一生懸命に働いた自分へのご褒美は高齢期の青写真のまずトップに置かなくては。その時機を逸してしまった花田さんをわたくしは通夜の晩に生きている人のように、心の中で頭を撫でつづけた。

鴨志田逸子さんはわたくしより四歳年上。享年八十四歳ということになる。新聞記者の草分で何度も国際会議にご一緒させていただいた。華奢まじやな体つきだが、かつてはファイト満々だった。夫と死別したあとは姪と一緒に鎌倉の端正な屋敷で暮らしていたが、その姪が結婚した後は、ひっそりと一人暮らしを楽しんでいた。足を痛めて杖を突いていたがいろいろな会合にも杖を突いて出席していた。きりつと背筋を伸ばした後ろ姿はわたくしの憧れだった。

社交的で好奇心満々だった鴨志田先輩の老いの青写真は想像以外のものだった。

人間のまさに旬の時代である高齢期は金持ちならぬ人持ちの真ただ中だというのに、なんと、彼女の老いの青写真は己が人生は己がものと、他人との交わりを一切絶つてし

まったのである。

杖を突き突き、好奇心いっぱいに出席していた会合にも顔を見せなくなった。

鎌倉の端正なお宅に伺い、ベルを何度も何度も押ししても、人のいる気配が感じられるのに空しく鳴り響くだけ。驚いたことに、その呼び鈴が神経に触ったのだろう。後日何ったら面会謝絶の張り紙がしてあった。

女の平均寿命の方が長いので日本は圧倒的に女性の高齢者の一人暮らしが多い。鴨志田先輩は老いては人の世話にならずの老いの自立を理想としたのだろうが、災害弱者はほとんど一人暮らしの高齢者である。

実はわたくしは酸素ポンプのお世話になっているが、家にいる時は部屋の隅にある酸素ポンプが空気を濃縮な酸素にして、ポンプの横についているビニールの管を通して肺に酸素を送り込んでくれている。地震があるとポンプにくくりつけられている状態なので、助けて助けてと泣いているわたくしがいる。ありがたいことに、五人家族の廣長一家が地域家族になっていてくれるので、がたと来ると誰かが必ずすつ飛んできてくれる。

わたくしが住んでいる杉並区は、災害弱者であることを登録すると地震が終わった後、

民生委員が安否を確かめに来てくれる。見捨てられていないと考えるだけで、生きる力が湧いてくる。

「歳を取ったら、他人様のお世話にはならない」と考える人が結構多いが、他人様のお世話になってこそ、生きていくのも悪くないぞと弾み心満点の境地に達することができるといふものである。様々な人との約束事に縛られて生きていくと、緊張感があるからだろう、意外と思えるほど、頭がクリアでいられる。

わたくしは病気のデパートのオーナーを自称するほど万病の持ち主だが、講演やインタビューの約束のある日は信じられないほど、背筋が伸びて元気元気状態になる。だから必ず講演の後は、「みなさんが呼んでくださったので、まだ人の役に立っていると、思いに励まされて元気になる」とお礼の言葉を申し上げることにしているが、生命力の根源である人の役に立っているという実感は他人との関係あつてのことである。

老後のための貯金と老いては他人の世話にならずのある種の傲慢ごうまんさは、まさしく老いの落とし穴ではないか。鴨志田さんは三年後に孤独死を遂げてしまった。死後一週間後に遺体が発見されたとき、改めて高齢期は金持ちならぬ人持ちと、わが心に言い聞かせたものである。

第五章

お葬式は生きて いる人のため

葬儀は生きている人のためのもの

あずさが、これから生きやすいように

最近「だれだれの息子です」「だれだれの娘ですが」と前置きをした後で友人の死を告げる電話が多くなってきた。

つい最近、「向田良子の息子ですが」という電話がかかってきた時、その後に続く言葉を予想して一瞬めまいでくらくらしてしまった。向田良子さんはわたくしよりも四歳年上だが一九七五年、国連主催の国際婦人年を機にスタートした「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」(のちに「行動する女たちの会」に改称)の事務局の一員として徹夜で宣言文を書いたこともあるし、ほかの様々な運動体のお仲間として四十年近く付き合ってきた心の通じ合う大切な友人だった。

心臓病が持病で入退院を繰り返していたが、夫が脳梗塞で倒れ、その介護に全力を挙げていた。幸いなことに夫は予後が良好だったが、たぶん看病疲れが原因だったのだろう。わたくしの恐れていたように、「向田良子の息子ですが」の後に「実は母の向田良子が昨夜亡くなりました」という言葉が続いた。

「母の遺言で吉武さんだけにおしらせしました」と言い、通夜と告別式の場所と時間を一氣に言つてのけた。

良子さんには運動仲間がわんさといる。その人たちに全員もれなく連絡するのはかなりの労力がある。

ありがたいことに運動仲間の一人に泣き泣き連絡したら、「一人でみんなに連絡していたら吉武さんがダウンしてしまふ。後は仲間任せなさいよ」とあつという間にネットワークができ、もれなく当日は運動仲間の誰彼が顔を見せてくれた。

告別式を終えた人たちは二階にあるお浄め用の食事を頂戴していく。わたくしも久方ぶりに会う方も大勢いるので一言言葉を交わしたいとお浄めの食事室に足を踏み入れた。丁度半年前の二月十八日にわたくしの「戦争の世紀を超えて わたくしの生きた昭和の時代」(春秋社)『万病息災病んでも老いても元氣でいるコツ』(講談社)と珍しく二冊の本の出版パーティが行われた。驚いたことに老若女性が二百人近く集まってくれたが、なんと車椅子だといわれていた向田良子さんが杖を突いて出席、その上「行動する女たちの会」のかつての仲間たち六人と挨拶までしてくれたのである。

最後にわたくしがお礼の挨拶をしたのだが、

「今回は七回目の出版パーティです。五回目の時に実行委員会の方たちに、一回も出版

パーティをしない方もいるのに五回目は恥ずかしいと言ったら「みんなが会える機会を願っているの。吉武さんはだしなんだから心配しないで」と言われ、以来よきだしであり続けるために、ぶれずに生きることに全力を挙げてきました。だし扱いしてください「ありがとうございます」と言ったら、耳元で「十回はやりましょう」とささやいた人がいた。

本を出したら出版パーティをするといわれるので、年二冊出版パーティにふさわしい本を懸命に書き下ろしてきた。年齢的にあと三冊なんて無理だよとほやきながら、生きる目的を与えられたことに感謝していたのでもある。そうささやいたのは向田良子さんだった。

お浄めの食事会では初めてのころは向田良子さんの思い出話に集中していた。大阪の保母Kさんが園児の父親の子供を産んだが、父親の一方的な考えで里子に出されてしまった。やっと見つけてその子供と東京に出てきたKさんを支援する会が向田良子さんの言いだしついでスタートした。

はじめのうちは瀬戸内寂聴こと瀬戸内晴美さんの家で引き取っていてくれたのだが、たぶん子供の泣き声が癪かんに障ったのだらう。すぐに引き取ってくれと向田さんのところに連絡があり、彼女のたつての希望でその親子を我が家で半年近く預かっていたのであ

る。連れてきてくれたのは土井たか子さんの秘書だった五島昌子夫妻だった。

知らない人が多いのでそんな話にみんなのめり込んでいたのである。

そのうち向田良子さんとさして年の違わぬ人たちが多いので、自分自身の人生の幕引き方に話が集中していったのである。

向田さんと同じ年のAさんは息子さんと二人暮らし。

「だから密葬にしてと強く言っている。後で息子に迷惑がからないようにお花もお香典も一切お断り。『偲ぶ会』も一切なし。そつと消えていきたいのよ」と言った後、同じ大学の後輩のHさんに「よろしくね」と後事を託したら、

「二つしか歳が違わないのにどっちが先立つかは神のみぞ知る。もつと後輩に頼んでおきましょうよ」

とやんわり言った後、

「私もともかくひっそり型。ええっ、いつ亡くなったのと言われるような人生の幕引きがいいわ」

と言つてのけたのである。

向田さんのお通夜も告別式もまことに平々凡々たるものだった。夫が杖を突いてひたすら泣いていた姿が印象的だった。お花を飾らせていただいて心持ちのお香典を渡して、

何か参加できたという思いで心が休まっていた。長年生きてくれば山あり谷あり。だから人生の幕引きである葬儀も自分の意のままにしたいと思う気持ちは分らないではない。

でも、昨今わたくしはいろんな友人の葬儀に参加するたびごとに、葬儀は実は生きている人のためなんだという自覚が強くなってきた。

『さざえさん』で一世を風靡ふうびした長谷川町子さんの葬儀はご本人のご遺志で密葬だった。供華も香典も一切お断りというのが本人の意志と言われて、ただひたすら困り果ててしまった。丁度体調を崩して入院中だったので、せめて大好きだった『さざえさん』の著者の葬儀には、ありがとうの意味を込めて供華だけでも出させていたできたかったからである。

高齢期の葬儀は参加する人も高齢者、病人もいっぱいいる。だから壮年期健康型にぱつしりと決められてしまうと、亡くなった方への深い思いを伝える手立てがなくて本当にうつ症状に落ち込んでしまう。

その怒りは遺族に向けられてしまいがちである。長谷川町子さんの場合は、多くのファンとロングセラーにするためテレビの人気番組にするために全力を挙げてきた人たち

の、見送りの場から排除された怒りは「社会性がない」「手間暇かけるのを惜しんだ」とひたすら遺族に向けられた。

それだけではない。どうしても仏前にお線香をと願う人の後が絶たず、なんと三年近くお線香をあげに来る人の切れ目がなかったという。

妹さんがしみじみ言っていましたっけ。

「姉の思いを重んじたおかげで本当にたくさんの方々にご迷惑をかけてしまった。死んだ人は自分の思いの通りの人生の幕引きができたから満足かもしれないけれど、あれだけの人気者になり続けてきたのは本当にたくさんの人たちのお世話になったおかげ。お礼の意味も込めて誰もが参列できる通夜、告別式にすべきだった。わたくしたちにもその配慮がなかった。だからどれだけ非難攻撃されたことか」と。

そんな話を向田さんとしたことがあった。

その時しみじみ向田さんが言った。

「ねえ吉武さん、葬儀って生きている人たちのものなのよね」と。

後で息子さんに聞いたら「お任せするからごく普通の葬儀にしてね」というのが一種の遺言だったそうである。

向田さんのお浄め食事会であの人が個性的な人生の幕引きを提案していたが、わたくしは黙って聞いていた。

わたくしにはあずさという一人娘がいる。別暮らしをするようになって二十五年になる。喪主はあずさである。わたくしが死んだ後も人間貧乏にならず、わたくしの友人ともいい関係を作つて生きていくためには、あずさたちがこれから生きやすい葬儀をしてくれればいいと心から思っているからである。

あずさにその話をしたら、本當にうれしそうに、

「輝子さんがいなくなったら本當にさびしいけどそれを機にまた友人知人が増えたら輝子さんへの供養くようになるものね。ホントに葬儀まうらひつて生きている者のためなのね」と、抱きつくようになつて言った。

第六章 駅伝で行こうよ

先輩が前を懸命に走ってくれた
わたくしも走った。そのたすきを後輩へ

呼吸器障害が進行して二十四時間酸素吸入器のお世話になることとなってしまった。家にいる時は、部屋の隅に大きなポンプが置いてあって、空気から取り出して圧縮した酸素をポンプにセットした管で、鼻から送り込んでくれる。青い管の先にビニールの管が付いていて、その先を鼻の中に差し込めるようになっていたのである。

外出の時は携帯用酸素ポンプを使用する。後ろに車が付いていて、まるでポチを連れ歩いていような感じになる。まだ四、五年前は、講演や対談、座談会の際には酸素ポンプを外せたが、今では酸素ポンプを外せなくなってしまうている。

不思議なことに酸素ポンプをつけたまま、講演をすると「元気が出た」と逆に評判がいい。

初めて酸素ポンプをもつて講演に行ったのは、入院中に医師の許可を得て行った大分の女性教師の会だった。病院の廊下を、酸素ポンプを転がしながら、ずいぶん歩く練習をしたものである。

飛行機の場合は、許可を求めるのが大変である。アメリカの場合は、九月十一日のツインタワーのテロ以来、酸素ポンベの持ち込みが固く禁じられている。

可能な地域の飛行機も、その航空会社の酸素ポンベを買った後、その酸素ポンベを乗せる席を求めなければならぬので、費用が十倍はかかりかねない。

その中では日本は極めて寛容だが、それでも主治医の診断書を提出して、取りあえず航空会社の許可は得てはいるが、搭乗ゲートでの検査は執拗しつようをきわめている。酸素ポンベを引いてゲートをくぐる時は、必ずパイパイと音が出る。するとそれこそ裸にせんばつかりに体中を調べまわる。ある時さすがの執拗さにむつと来て、

「もしあなたがわたくしと同じ呼吸器障害でこんなに体を弄いじくり回されたらどんな思いをするかしら」と怒気まじりに言ったら、さすがに解放してくれた。

わたくしは帝人の酸素ポンベを使っているが、ホテルに泊まる時は、連絡しておく、そのホテルに部屋用の酸素ポンプと替えのポンベを二本届けてくれる。

ホテルのフロントで「酸素ポンベをお願いします」と言うと、

「すでにお部屋の方に設置してあります。スイッチを入れてくださればそのまま使えます」

と実に丁寧に対応してくれる。東京のあるホテルでは、常時ポンプとポンベが置いて

あつて、突然の旅立ちで連絡できなかつた人の救済にあたつてゐる。

大分の講演は翌日の十時からだったので、前泊したのだが、その夜食事会があつた。ホテルの万全の受け入れについて話すと、

「それは吉武さんがお金持ちだからよ」という返事が返つてきた。

人生五十年から人生百年へ。今わたくしたちは倍の人生を生きる時代に遭遇している。長く生きれば、だれでも体にマイナスの面が出てくる。その分だけ補助器具が見事に発達してきている。

家だけのポンプから携帯用ができたり、滑らず美しい杖に、片手で持てる軽い、軽い車椅子。数えあげたらきりがなが、使用する側の知識不足と、意識の変革ができていないために、補助器具の恩恵を十分に受けそこねている。わたくしは二十年近く妹の主宰する句会に入っている。仲間の中には酸素ボンベを使う人もいるが、メーカーのサービスを知らないために、一泊の吟行をあきらめてしまつてゐる。

前述したように、わたくしが「お金持ち」だからメーカーのサービスがあるわけではなく、酸素ボンベもボンベも東京厚生年金病院からのレンタルなので、何回サービスを受けようと、家にボンベを運んでもらつていても、月九千円で収まつてくれているのだ。

その話をしたら、夕食会に出ていた人たちが「人生百年時代を生き生きと生きていくための意識の変革と、補助器具に対する知識の必要さ」を口々に語って飽きなかった。

翌日の演題は「美しく老いる」それなのに、酸素ポンベを片手にぐちゃぐちゃと弁解していたら、演題のテーマがぶっ飛んでしまう。ともかく颯爽と登場しなくてはと、先に送っていたポストンバッグからあれこれ洋服を取り出して、とっかえ、ひっかえ替えては、酸素ポンベをもって姿見に映し、一番元氣そうに見えたフリルいっぱい洋服に決めたのである。

翌日は颯爽と登場し、何一つ弁解しないで酸素ポンベをぶん回し、ぶん回し、思いのたけを語り続けたのである。終わった時の盛大な拍手、待合室に戻ると実行委員長が抱きついてきた。彼女の母上は、酸素ポンベを使うようになって以来、お引き籠もりになつてしまった。

「今日の講師は酸素ポンベを使用している。だからぜひ講演会に来て」と頼んだら素直に来てくれた。

帰りがけに娘のところによって「このまま人生をあきらめるわけにはいかないわ」とまるで犬のポチを引っ張るように、胸張って帰って行ったのだという。

その時はたと思いついたのである。酸素ポンベをアクセサリ化しよう。

ボンベが重いのでケースは、嚴重な紺のナイロン製で、周りが黄土色の縁取りがしてあり、いかにも事務的としか見えない。病院に戻って、友達のデザイナーにアクセサリー化を頼むと、すぐに飛んできてくれたが、前にも書いたようにボンベはやけに重く、ケースは普通の布では持ちこたえられない。ということ、ナイロン製のケースに着せる「お洋服」を作ることになった。でこぼこしているの、なんと三回仮縫いをして七枚の「お洋服」ができた。二月に一回血液内科に検査に行くが、洋服に合わせてアクセサリー化した携帯用の酸素ボンベを引っ張っていると必ず、

「母や、あるいは父にプレゼントしたいのですが、どこでお求めになりましたか」と聞かれる。

退院した後、しばらくの間は、講演や対談の時には酸素ボンベを外すことができた。わたくしが呼吸器障害に取りつかれたのは、一九七八（昭和五十三）年。過労が引き金になり、膠原病の親戚筋のシェーグレン症候群を発症してしまった。シェーグレン症候群は、涙液や唾液や体液がつかれなくなる、いくなれば体が砂漠化していく、という極めて厄介な病気である。

わたくしは、肺の粘膜を集中的にやられて自然気胸となり、空気が抜けると心臓麻痺

の恐れがあるので、右側三部屋のうち、上二つと三つ目の三分の一を切除されてしまった。おまけに左二部屋のうち一つ半が肺気腫。その頃からボンベなしで、息切れしながら歩いてきた。しかし健康な肺がカリニ肺炎にかかってしまったため、酸素ボンベのお世話になることになってしまったのである。以来、歩いて近くのポストに手紙を入れに行けなくなってしまう。もちろんデモや、集会や、遠方の講演には独力では行かれない。なくなってきた。

あずさが「山形や、秋田や、大阪などに講演に行ってきた」と、軽やかに話すのを聞いているうちについうらやましくなると、「いいわね。忙しく動けて」と言うにあずさが、

「でもね、わたくしの年の頃は、輝子さん一日三回講演に行ったり、様々な運動の先頭に立って動き回っていたじゃない。もう高齢期に入ったら後輩に譲らなくては。百年の人生にはフルマラソンは無理。後輩にたすき渡して走ってもらおう。駅伝スタイルでいかにしては」

言われてはつと気が付いた。若いころ、先輩の佐多稲子さんや、石垣綾子さんや、市川房枝さんたちが、前を懸命に走ってくれた。その後ろ姿を見ながら「後輩にこんなに素晴らしい後ろ姿を見せたい」と、わたくしも懸命に走った。気が付いたら、先輩たち

からたすきを受け取っていたのである。

すでにわたくしは駅伝スタイルを踏襲とうしゅうしていたのである。そして今は落合恵子さんや、福島瑞穂さんや、竹下景子さんや、クミコさんたちがいてくれるのである。たすきを受け取ってもらったら、受け取った人の走り方を全面的に認めて、その足取りに合わせて伴走する。

歳を重ねたら「わたくしが、わたくしが」と自己主張するのではなく、若い人たちを励まし、役立って生きる。「人生は駅伝だ」と理解して以来、残り少なくなつた人生に輝きが出てきたような気がする。

弔辞

吉武輝子さんをお送りする辞

落合恵子

吉武輝子さん。

信じられない想いで、わたしたちはいま、ここにいます。

いつだって、不死鳥のように甦よみがえる、あなたでしたから。

吉武輝子さん。

ずっとずっと闘い続けた人生でしたね。わたしたちはあなたから、闘う姿勢を学びました。

「女が女にやさしくなくて、どうするの」

あなたが書かれた評伝『女人 吉屋信子』の、その言葉をそのまま実践し続けてこられた吉武さんでした。

吉武輝子さん。無念なことにこの社会にまだある、あらゆる差別、特に女へのそれを激しく拒絶し、丸ごとぶつかっていくあなたでした。この社会に媚こびて、受け入れられる必要なんてない、と。

吉武輝子さん。講演をされる時、集会でメッセージを発せられる時、あなたはいつも腰に手を当てて、胸を張っておられました。

それはとても、凛々^{リッリ}しく、格好よく見えました。しかし実際は、躰の痛みをそうすること支えておられたのですね。

「誰かに見送られる時、バイバイと言って姿勢を整え、背筋をのばし、サツサツと歩きだし元気な後姿を見せるのよ。でも、角を曲った途端、疲れがでて、もう誰も見ていない、と思った途端、どっと疲れがでて……足を引きずっているわたしがいるの」
そう、おっしゃってましたね。

吉武輝子さん。あなたはそうやって、ずうっとご自分を支えてこられたのですね。

吉武輝子さん。わたしたちは、あなたが語られる佐多稲子さんをはじめとして、すでに本の中でしかお目にかかれない女性たちについて耳を傾けるのが好きでした。

素敵な女たちを語る時の、吉武さん、あなたも素敵でした。

吉武輝子さん。あなたの激しさの底には、いつだって苛酷な人生を生きざるを得なかった人々への共感がありました。

あなたのやさしさの底には、いつだって、不正や差別や理不尽やずるさを許さない怒りが燃えただっていました。

誰かの、痛いという叫びを、その誰かの中にとどめておくことなく、自分に引き寄せ、自分を重ね、痛みを与える社会に対する憤りにかえて、世に問いかけ続けたあなたでした。

反差別、反戦、反基地、護憲、脱原発。あらゆる差別の構造を、ご自分の言葉で掌にのせ、わたしたちに「あなたのテーマなのだよ」と差しだしてくれました。

吉武輝子さん。フェミニズム批評がこの国には少ないね。そんな話をしたことがありました。そうしてあなたは、『女人 吉屋信子』を、『ブルースの女王 淡谷のり子』を、『炎の画家 三岸節子』等、一連の作品を書かれたのです。女が女の人生を読み解き、改めて喝采かつさいを送ってこられたのです。

長い夜。何度目かの入院からご自宅に戻ったあなたがおっしゃった言葉が、いまでも心に鮮やかです。

「ひとは、いつかは死ぬ。いつかは死ぬと思うから、いつかは死ぬと思うから、今日、闘うことができるのよ。永遠に続く、いのちだったら、聞えないかもしれない……」

吉武輝子さん。母が亡くなった時、あなたはこんな言葉を贈ってくださいました。

「そのひとがいなくなつて、本当に純粹に、一ミリグラムの雑念もなく、心から泣けるひとが、自分にはいる……。そのことを感謝しようよ。心から愛するひとがいたことを」

吉武輝子さん。

わたしたちはいま、その言葉を、あなたにお返しします。お返ししなければならぬことが、この上なく淋しく、せつないことではあります。

あなたはわたしたちの偉大なる姉であり、sisterhoodの源でした。

吉武輝子さん。

どうしようもなく、どうしようもなく、淋しい……。

「いいんだよ、泣いたって。でもね、思いつきり泣いたら、わたしたちのsisterhoodを受け継いでいってよ、約束ね」

あなたの声が、あなたの口調が、どこからか聴こえます。

二〇一二年四月二十一日

落合恵子

【著者紹介】

吉武輝子（よしたけ てるこ）

1931年生まれ。54年、慶應義塾大学仏文科卒。東映宣伝部入社。61年、日本初の女性宣伝プロデューサーとなる。のち、文筆活動に入る。「吉屋信子記念館」運営副委員長、「原爆の図丸木美術館」理事、NPO法人「高齢社会をよくする女性の会」理事、NPO法人「女性の安全と健康のための支援教育センター」理事。1968年、「婦人公論読者賞」受賞。

著書には「女人 吉屋信子」「ブルースの女王 淡谷のり子」「炎の画家 三岸節子」（以上、文藝春秋）、「病みながら老いる時代を生きる」（岩波ブックレット）、「老いては子に逆らう」（講談社+α文庫）、「おんなたちの運動史——わたくしの生きた戦後」（ミネルヴァ書房）、「夫と妻の定年人生学」（集英社文庫）、「生きる。一八〇日目のあお空」「置き去り——サハリン残留日本人女性たちの六十年」「ひとりの老後を心楽しく生きる方法」（ともに海竜社）、「戦争の世紀を超えて わたくしの生きた昭和の時代」（春秋社）、「万病息災 病んでも老いても元気であるコツ」（講談社）ほか多数がある。2012年4月17日逝去。

わたくし、八十歳になりました

二〇一二年九月二十五日 発行

著者よしたけ てるこ 吉武輝子

発行者 下村のぶ子

編集 藤波定子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区明石町十一の十五

〒一〇四—〇〇四四

電話 (〇三)三五四二—九六七— (代表)

FAX (〇三)三五四一—五四八四

ホームページ <http://www.kairyusha.co.jp>

本文組版 キヤップス

印刷・製本所 半七印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えします。

©2012. Teruko Yoshitake. Printed in Japan

非売品

わたくし、八十歳になりました

吉武輝子